

2011～2012年度 R.I.第2760地区  
東名古屋分区

## 記 錄 誌



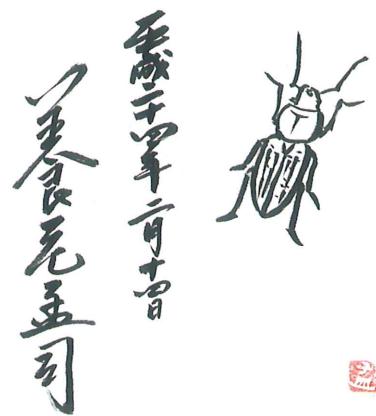
# INTERCITY MEETING

本質を見抜く 一これからの環境 エネルギー問題—

2012年2月14日(火)

名古屋東急ホテル 3階 ヴェルサイユの間

ホスト：名古屋千種ロータリークラブ



## 第一部 式典・講演

司会 足立一郎

16:00 開会・点鐘

君が代・ロータリーソング “奉仕の理想” 齊唱

16:05 ガバナー補佐挨拶

大口弘和 ガバナー補佐

特別出席者紹介

谷口 優 分区幹事

ガバナー挨拶

松前憲典 ガバナー

16:20 講演 本質を見抜く —これからの環境 エネルギー問題—

東京大学名誉教授 養老孟司 氏

17:50 次期東名古屋分区ガバナー補佐紹介

大口弘和 ガバナー補佐

並びに次期 I.M. ホストクラブ発表

井上雅之 次期ガバナー補佐

次期東名古屋分区ガバナー補佐挨拶

横田幸三 会長エレクト

次期 I.M. ホストクラブ会長挨拶

18:00 点鐘

# 2011～12年度IM(Intercity Meeting)開催にあたってのご挨拶

第2760地区ガバナー 松前 憲典

2760地区のロータリアンの皆様におかれましては、つつがなく新年をお迎えになられ、お慶び申し上げます。

昨年はガバナー公式訪問と地区大会の開催にあたり、多大なるご理解とご支援を賜りました。82クラブ訪問の節は温かいご歓迎をいただき、ガバナー終生忘れることができません。心よりお礼を申し上げます。

さて、2760地区には8分区あります。各分区がIMを開催していただき、研修と親睦でロータリーの活性化を進めて下さることに敬意を表します。

1月はロータリー理解推進月間でありました。ロータリーを楽しむには、ロータリーを知ることが必要であります。「親睦」と「奉仕」のバランスのとれた活動は、ロータリーを理解することから始まると言われています。

さて、ロータリーは奉仕の精神から成り立っております。廣畠富雄RI第2700地区パストガバナーは「ロータリーの心」をESSで表現されております。EはEnjoy(楽しむ)毎週の例会で地域の職業を代表する会員同士が、信頼感を高めながら楽しむ。一つ目のSはStudy(学ぶ)ロータリーから人生哲学、職業倫理を学び、多くの会員から学び、自己研鑽し、人間性を高める。二つ目のSはService(奉仕する)思いやりの心で、人のお役に立つ行動を、というロータリーの奉仕をごく自然に、自分の生活の中に活かし、世のため、人のために尽くす。これがロータリーの真の姿であると言われております。ESS(Enjoy、Study、Service)とは私たちロータリーメンバーが互いに磨き合い、楽しみ、学び、奉仕することが人間の真の満足を充たす道になると思います。

片山パストガバナーは、ロータリーの目的は奉仕であり、奉仕は親睦から生まれ、親睦は出席から始まると述べられております。

- ロータリーとは奉仕と親睦を大切に、人道的奉仕を行い、あらゆる職業において、高度の道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親睦と平和の確立に寄与する職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体であります。
- ロータリーの目的と2本柱を高く掲げる。
  - ・奉仕と親睦を大切に
  - ・ロータリアン自身の幅広い人間形成、人格陶冶、自己研鑽。
- ロータリーでは奉仕の理想を掲げております。

○ロータリーの哲学とは「ロータリーの奉仕の理念」であります。

○奉仕の理想とは、他人のことを思いやり、他人に役立とうとする思いやりの気持ちを実行に移す。

○2つの奉仕の理念

①奉仕哲学 Service above self

②実践倫理 最もよく奉仕する者、最も多く報いられる。

ロータリーの友2007年1月号、RI会長ウィリアム・ボイド氏は「ロータリーの根幹」と題して、次のように述べています。

・ロータリーは友情と親睦、国際理解と協力、職業倫理と地域社会における指導力など、多くのものが成り立っている。

#### 【ロータリーの根幹】

①ロータリーとは、奉仕に従事し、超我の奉仕を実践することであります。

②奉仕の五大部門(クラブ・職業・社会・国際・新世代)を中心に奉仕のバランスとロータリーの目的を達成することであります。

③ロータリー財団を強化し、会員増強に努める。

#### 【6名の著名なロータリアン】

①ポール・ハリス

②ドナルド・カーター

③ベンジャミン・フランク・コリンズ

④アーサー・フレデリック・シェルドン

⑤ハーバート・テーラー

⑥アーチC・クランフ

皆様と共にロータリーを勉強していきたいと思っております。本年もどうぞ宜しくお願い致します。奉仕の実践、晩年は社会に貢献することで、人生に一輪の花を咲かせようではありますか。

# 本質を見抜く　—これからの環境　エネルギー問題—

東京大学名誉教授 養老 孟司

皆さんこんにちは。養老でございます。今日はお呼びいただきありがとうございます。

「本質を見抜く—これからの環境　エネルギー問題—」という立派な題がついて、そんなふうな話をしなさいということだと思います。私はもちろんこういうの専門でも何でもないんですけども、いわゆる環境問題に昔から関心がありました。

私が育ってくる時にずっと日本が変わってまいりまして、多くの方が、暮らしがよくなる、経済が発展するととらえておられました。私は虫とりが好きで山にし�ょっちゅう行っておりましたので、そっちのほうが変わってくるのが非常に気になっておりました。別にそんなことはどうでもいいんですが、だんだん現代に近づいていろいろなことを考えるようになりました。

今日も東京から新幹線で参りましたけれども、とにかく名古屋なんか来るのがめちゃくちゃ便利ですね。私は鎌倉に住んでいまして、東京は横須賀線で行くんですけども、横須賀線は15分置きぐらいになっている。名古屋に新幹線で来ると5分置きか10分置きで来られますので、名古屋のほうが便利じゃないかという感じなんですね。

こういう状況が当たり前かというと、実は裏に非常に大きな問題があるというのは皆さん御存知だと思います。何かといったらエネルギーの問題ですね。エネルギーというのは結局何だったかというと、実質的には経済成長だったということがわかってまいりました。早い話が、「3%経済成長」とか新聞にいろいろ書いていますが、パーセントは何かというと、実体経済に関する限りはエネルギー消費の増加です。3%経済が成長するということは、乱暴に言えば、3%エネルギー消費が増えるということです。ですから、今の社会で皆さん方が経済を成長させるとおっしゃるんであれば、それはエネルギーを余分に使うことを意味する、そう思っていいと思うんですね。これは経済じゃなくて、むしろ理科的な話であります。

それがどこまで可能かという問題が最初に起こったのは、多分60年代後半のローマクラブです。これもいろいろ言う人があって、政治的な発言でもあると思いますけれども、時期とか誰が言ったということを除けば、我々が地球の資源をただ使っていけば、それがどこかでなくなることは当たり前なんですね。どこまでいっても当たり前です。石油は、少なくとも20世紀の間はかなり豊かに供給される。

今度日本のことを考えますと、年配の方は覚えておられるかもしれませんけれども、この前の戦争がございました。あの戦争のことについて調べてみれば、本当に山のように本がありまして切りがないと思いますけれども、余りそういう見方をする方がないので申し上げますと、

私は、一番大きかったのは、やっぱりエネルギーじゃないかという気がするんです。

それはなぜかというと、昭和16年にABCDラインというのができて、年配の方は御存知じやないかと思います。ラインというのは包囲陣と訳していましたが、Aはアメリカ、Bはブリテンでイギリス、Cはチャイナ(中国)、Dはダッチでオランダです。この4カ国が日本に石油を禁輸したんですよ。私は、戦争の直接の原因はそれだと思います。

石油を禁輸されると、今はホルムズ海峡封鎖で8割の原油が入らなくなるということですけれども、当時もこの4カ国が石油を日本に入れないと決めますと石油がなくなっちゃうんですね。それでお考えいただきたいのは、当時石油がなくなって困ったのは誰かということです。簡単な話が、百姓、農民だったらちっとも困らないんですよ。工業化しておりませんから、耕運機を使っているわけでもなし、普通の人は困りません。車もこんなに普及していません。列車だって石炭で動いていましたから。じゃあ困ったのは誰かというと、明らかに軍部ですね。近代兵器と称して、海軍で言えば戦艦から駆逐艦、あるいは水雷艇まで、もう一つは飛行機です。これは全部ガソリンで動きますから、それを止められたら実質的に一番危機を感じたのは軍部だったろうと思います。それが余り言われませんですね。

実は、軍部が独走したというよりは、エネルギー問題で本気で困ったのが軍部だったのではないかと私は思います。恐らくほかの人がのんきでしたから、そのギャップで、いわば軍部の独走に見えたんじゃないかなと私は思っております。ですから、簡単な話が、石油禁輸されたら日本は戦争に入らざるを得なかった。

それから、もう一つ似たようなことを申し上げれば、ヒトラーのドイツが、ナチスがバルバロッサ大作戦というので旧ソ連に侵入します。これも恐らく根本の理由は、先を見たドイツがコーカサスの石油が欲しかった。やっぱりあそこも石油がなかったんですね。それでスターリングラード攻防戦になるわけですが、それも余り書かれないです。どちらも石油が中心になっています。

さらに言うなら、軍が石油を手に入れるために、当時インドネシアはオランダ領でありましたから、オランダ領のインドネシアの油田を占領します。パレンバン空襲と私も覚えていますが、「空の神兵」という軍歌がありまして、若い方は全然知らないかもしれませんけれども、なけなしの落下傘部隊まで使って、火をつけられたら終わりですが、無事に占領致します。しかし、油田が手に入ったらそれで終わりかというと、そうはいきません。石油が要るのは内地ですから、そこまで原油を運ばなきゃいけないわけですね。そうしますと、どうしても必要なものは制海権です。

そうやって論理的に考えていったらすぐわかるのは、当時その制海権を確保するには何をしなきゃいけないかというと、真珠湾のアメリカ太平洋艦隊とシンガポールの英國東洋艦隊の二つをつぶさなければだめだ。そこまではきちんと論理どおりに戦争が進行したんです。それを

文科系の方が歴史を書きますと「初戦の大勝利」と書くんですけれども、初戦の大勝利というよりは、やることが決まっていれば日本的人はきちんとできるんですよ。問題はその後で、石油まで行ったら次にやることがないということに気がついたんだと思います。それがミッドウェーになった。戦史の本を読みますと、ミッドウェーに何をしに行ったかわからないという批評が書いてありますが、私が今述べた石油に関するような必然性がなかった。そこから先は、実は必然性のない戦争だったと私は解釈しております。

そうすると非常に見方が変わってしまうはずで、特攻隊から原爆に至るまでのは一体何のためだという話になってしまふんですけども、そこが人の考え方の怖いところだと私は思うんですね。ちょっと冷たいようですねけれども、我々も戦後これだけの年数がたてば一歩離れて見ることができるわけで、結局エネルギーの問題をめぐってあの戦争は起ったんじゃないかなという気がします。

じゃあということで20世紀をもっと大げさに見て、20世紀はどういう世紀だったかというと、これは本当に偶然ですが、20世紀の初め、1900年にアメリカでテキサスから大量の石油が出ているんです。それまでもペンシルバニアあたりから石油は出ていたんですが、アメリカ人は主として灯油に使っていたわけです。ランプのオイルですね。クジラをとっていたのも実は油をとるために、日本が開国しなきゃならなくなつたペリーがやってきたのも、捕鯨船に水と食料を供給しろという話だったんですね。その程度にしか使われていなかつた石油が1900年に大量に出ますと、当然ですが、企業家たちがその利用を考えることになる。

ちょっと調べてびっくりしたんですが、1903年にはフォードが労働者の家庭にも1家に1台の車という構想を発表しているんですね。同じ1903年にライト兄弟が飛行機を飛ばしています。これがアメリカですから、20世紀は石油とアメリカの世紀だったというふうに言ってもいいと思うんです。

当時アメリカは発展途上国ですよ。例えば学会の論文をずっと読んでいましたけれども、解剖学は古いですから、20世紀の初めとか19世紀の終わりごろの論文もよく読みましたけれども、アメリカ人が書いている論文は、当時では完全に後進国の人人が書いた論文あります。それが石油の産出とともに急激に発展していきます。社会システムも当然それに絡んでおりますけれども、乱暴に言いますと、20世紀は石油とアメリカの時代だったと考えていいんじゃないかな。

50年代、60年代がアメリカの最盛期ですね。次に何が起こるかというと、70年になって、これは皆さんも御記憶の方が多いんじゃないかなと思いますけれども、日本にも数年遅れていますが、いわゆる第一次オイルショックが起こります。これは何が起つたのかというと、アメリカが石油の輸入国に変わりました。つまり、あれだけの石油を産出していた国が、海外から石油を買わないとやっていけない状態になります。これがオイルショックです。

アメリカが輸入国になったということは世界市場にアメリカが石油を買いに出たということで、アメリカが買いに出たということは石油の値段が上がったということで、石油の値段が上がると何が起こるか。しばらくすると不況が起こります。先ほど申し上げましたけれども、エネルギー消費そのものが経済成長だとしますと、原油価格が上がるということは、たちまち経済を失速させますので、半年もたつと必ず不況が来る。これは世界不況という形をとります。それでエネルギー問題が経済問題を支配しているということがわかってまいりました。

私も本で調べただけですが、読んでびっくりしたのは、それまでの経済学はエネルギーと経済の関係を考えていなかったんです。エネルギーは経済成長とともに増えるという方程式をきちんとつくったのは、ドイツの物理学者だったんです。そのモデルにきちんと当てはまったのがアメリカと日本だった。日本もアメリカ型ですから、エネルギー依存の経済をずっとやってきて、それを我々は高度成長と呼んだ。それを別な言い方で、文科系の方は「自由経済」と呼んでいます。

自由経済っておもしろい言葉ですが、企業活動は自由にやってよろしいということです。それがいいというのはどういうことか。つまり、自由というのは何らかの枠がないと意味がないんですね。全くの自由というのは意味を持たないと私は思います。ある枠の中で好きにしているよというのが自由です。じゃ、どういう枠か。今考えてみるとそれがわかるわけで、原油の価格。石油の値段が一定という枠です。石油価格が一定であるということは、幾ら使っても値段が上がらないということ。エネルギーに関してそれをやりますと自由経済が成り立ちます。その中ではまさに企業活動が盛んになりますし、エネルギーがどんどん投入されますから経済が発展して、それを我々は右肩上がりと呼んできたんだということも、今になるとわかります。

原油価格が上がったらどうなるの。実は何度も急に上がっているんです。これも読んだ話ですが、戦後7回の世界不況のうち6回は、原油価格が急に値上がりした半年後と言われています。私は経済もエネルギーもほとんど素人ですけれども、そういうことを調べてみると、わかることはわかっているんだなという気がしてくるんですね。

我々の経済は基本的にエネルギーとリンクしちゃっている。これは当たり前ですね。実体経済を考えますと、これは財貨、実際のものを生み出すわけです。実際のものを生み出しているのは人間の労働プラスエネルギーですから、実体経済がエネルギーに依存することもわかり切ったことなんです。

現在の日本を切った時に、人間のエネルギーと我々が使っている電気とか暖房とか交通とかに使っているエネルギーの比率はどうなっているかということですが、それを計算した人がおります。皆さん方が御自分で毎日つくり出しているエネルギー、これを一番低い時は基礎代謝といいまして、生きていくのに必要なエネルギーです。つまり、心臓も動かさなきゃいけないし、呼吸もしなきゃなりませんから、そういうのに必要なエネルギーを医学では基礎代謝と言

っております。それプラス身体を動かして何かするとエネルギーがかかりますから、それは食べ物でつくり出しているんですね。計算すると、日本人は現代生活で、そうやって皆さん方が1日につくり出す平均のエネルギーに対して、外部エネルギーとして40倍のエネルギーを消費している。そういう乱暴なというか、簡単な計算ができます。

そうすると、現在の皆さん方は、別な言い方をしますと、江戸時代ぐらいの人は恐らく2倍程度だったと思いますから、外部を含めて言いますと、江戸時代の20人力か30人力ぐらいのエネルギーはお持ちなんですよ。問題は、40倍の外部エネルギーがいつまで続くかということです。

もう一つは、このことが人間あるいは社会に対してどういう影響を及ぼしたかということです。エネルギーがたくさんあればあるほどいいんだよというのは、確かにそうです。あれば乐ですから。今この部屋もそうです、明るいし暖房もきいています。これはできます。しかし、これをやっていくとどういう影響が出るだろうかということです。

私はしみじみ思うんですけれども、それが一番はっきり見えたのは、戦後ですと一次産業だと思います。55年段階で4割いた一次産業従事者は、現在4%を切っているんじゃないかなと思います。つまり、10分の1に減りました。なぜかというと、一次産業は元来人間のエネルギーそのものであった。田んぼを耕すのも、森の木を切るのもですね。これに40倍のエネルギーを持ちこんだら、人の一人一人のエネルギーはほとんど意味がないですから、そういう意味でどんどん機械化されていくって、逆に林業は機械化が遅れたためにほとんどぶれちゃいましたけれども、農業も今は石油がないと成り立たない状態になってまいりました。

マンパワーでやっていたところを全部機械で置きかえられて、これを合理化と言っています。それはそれでよかったわけです。ただ、当然どんなことにも裏があるわけで、その裏は何だったんだろうということを最近よく考えるようになりました。

第一に、その裏というのは、外部エネルギーが40倍あったら、今度は人のエネルギーは無視できますね。つまり、人間の価値が下がった。そうじゃなくて人間は知恵があるからと皆さんをおっしゃるかもしれませんけれども、知恵のある人ばかりじゃないんですね。いろいろな方がいます。でも、少なくとも外部エネルギーが低い段階では、人はどうしても大切なものだったんですよ。だから、一次産業に人が大勢いたんです。しかし、外からエネルギーが入りますと、人間はどんどん安くなっています。だって、人間のエネルギーを使うぐらいだったら機械を使ったほうがいい。知らず知らずだと思いますが、これは相当な勢いで人間の価値を下げてきたのではないかなという気がするんです。

変な話ですが、こういう外部エネルギーが一切に近いくらいなかった時代が江戸時代です。森の木だけですね。木を切って炭と薪でやっていました。そういう時代のことをちょっと想像していただきたいんですが、私がそのことについて考え出した時に一番おもしろいなと思った

のは、実は新井白石という人です。

新井白石が、今で言えば首相に近いところまで幕府で上り詰めていきますが、出自を見ますと、別に偉い人でも何でもない。江戸時代は身分制度だから、相當にいい家柄なのかというと、別にそうじゃないですね。お父様は関東の譜代大名の家来で、偉くも何ともない。しかも、殿様がおかしくなっちゃったというので辞めちゃった、浪人しちゃったという人です。そこの息子が見出されてだんだん偉くなってくるんです。

「折たく柴の記」という白石の自伝を若い時読んだことがあります。僕らは新井白石がどういう人だと教わったかというと、一生懸命勉強して、眠くなると井戸端へ行って冷たい水をかぶって目を覚まして勉強したことしか知らないんですけども、実際に自伝を読んでみると、おもしろいことが書いてあったんです。

白石が10代の半ばか終わりに近い、今で言えば高校生か中学生の頃に、河村家から養子に来ないかという誘いを断ったという話が書いてあります。河村家というのは、河村瑞賢の家でございます。河村瑞賢といえば、当時の大実業家です。江戸の大火の時に木曽の材木を買い占めて財をなしたという、人の不幸につけこんでと今でも怒っている人がいますけれども、大変な実業家でございました。河村瑞賢はもう死んでいまして子供の代になっていますが、当主の妹が未亡人になっちゃって、10代の新井白石に家屋敷と金3,000両をつけるから養子に来ないかという誘いがあった。

ちょっとお考えいただきたいのは、インターネットも入学試験も何にもない時代に、河村家がどうして新井白石という人に目をつけたのか、どうやって探したんでしょう。調べてみると、目をつけたのは河村家だけじゃないみたいです。角倉了以の家からも養子に来ないかという口があった。そういうのを調べていきますと、江戸時代は猛烈な勢いで人を探していた時代じゃないかというのが浮かんできます。口コミだけでやっているわけです。

何でそんなに人を探すんだろう。私は戦中から戦後の育ちですから何となくわかるような気がするんですが、今東南アジアに行くとよくわかるんです。例えば、私はよくラオスに行きます。毎年行きまして、去年も2回行っていますが、私の知り合いがラオスに25年住んでいまして、結婚してもう10年近くなるんですが、街中に家を構えて、奥さんの両親、奥さんの兄弟が全部同じ家に住んでいまして、だんだん家族が増えるんですね。奥さんは5人兄妹ですけれども、その5人がそれぞれ結婚して子供ができると増えますね。何でそれができるかというと、私の友達は日本人ですから、彼に収入があるからです。働き手が1人いると周りが全部非常に助かるんですね。

鵜の目鷹の目で優秀な人を探したのが江戸時代ではないかという気がします。最近そういうことを書く人があって、例えば2年か3年前の「天地明察」という小説ですが、これは江戸時代の改暦、暦を変える話です。暮打ちの家から拾われた男が最終的に成し遂げます。暦という

のは新しくしないと役に立たないんですけれども、その話を書いている。あるいは皆さんよく御存知の例で言えば、伊能忠敬が日本全国の測量をやるわけですが、あれだって50代の後半からだと思います。今よく日本が能力主義とか言っていますけれども、本当に能力主義だったのは、ひょっとすると江戸時代じゃないかという気が私はするんです。

田沼意次にしても柳沢吉保にしても、元来あんなに偉くなる人ではないはずです。我々は別の教育を受けてきてまして、例えば明治維新といえば福沢諭吉ですけれども、福沢諭吉の「門閥制度は親の敵」と、ああいう固定した制度が優秀な人の登用を妨げたと考えるわけですが、その福沢諭吉にせよ、勝海舟が典型ですけれども、やっぱり偉くなっているんです。そういう意味で江戸時代は、エネルギーがない分だけ人を見る目があったのではないか。

人を見る目は結構難しいんですね。翻って現在の日本を見ていただくとおわかりだと思うんですが、ついこの間もセンター試験がございまして、いろいろ不祥事とか言って騒いでいました。読売新聞の社会面のトップに出たのが「人生かかってるのに」という受験生の言葉なんですね。1日の試験に人生かかっているということを若い人が言う時代はどういう時代か。人生は宝くじじゃないですから、1日の試験で決まるわけがない。そんなこと当たり前ですけれども、新聞がそれをトップに書くということは、何となくそう思っている、それが受けるだろうというか。そこでは人を見る目もくそもないですね。

この中に企業をやっておられる方があるかどうかわかりませんが、例えば会社で人を探る時に、次にこの会社を任せることで本気で探っているか。河村家が新井白石を探していたように、本当にそれを探しているところがあるんだろうか。東大の場合は、今度は9月入学にすると言っていますが、探るほうも、適当に人を見るような時代になってきた。

これのいい点は、40倍のエネルギーがありますから大した当たり外れはない。とにかくある程度の能力があついてくれればいい。しかし、生きるか死ぬかじゃないんですけれども、本気でぎりぎりで生きていることになると、今度は誰を信用するかという大問題になってきます。そういう意味で、我々は人に関してはかなり甘い時代を通過してきたかなという気がするんですね。それは自然に起こったことですからいいも悪いもないんですけども、何が不足してきたかというと、人を見る目であります。

私なんかもしょっちゅう言われます。女房が私の顔を見て「あんたは本当に人を見る目がないんだから」。私も女房の顔をじっと見て「本当にそうだよね」って言ってやります。実はこれが夫婦としては一番正しいあり方なんです。ピンとこないと思いますけど。なぜかといいますと、理屈を言うようすけれども、今の話ですと女房と私の意見は人を見る目がないという1点だけ一致しているんですが、内容を考えますと90度違っているんですね、全然違う中身。お互い関係ないんですよ。実はこれが正しいあり方。なぜかというと、意見が正反対の夫婦は意味がないですね。けんかしてゼロになって終わり。外から見れば夫婦は2人で1組ですから、

2人で1組の力が最大になるのは意見が90度の時です。

変な理屈を言うようすれども、組織に外国人を入れる。文化的背景がかなり違った人を入れると活性化するというのは、そのことだと思うんです。私も経験があります。例えば東京藝大で長年美術解剖の講義をやっていましたが、日本人の学生だけの年がありますと、議論が甚だ不活発です。そこに外国人の留学生が1人入っていますと全然違ってくるんです。彼らは物おじしないで何でも聞きますから、こっちもいろいろ答えなければなりませんのでいろいろ言います。そうすると日本人の学生もつられていろいろ考え出すんです。

日本人だけだと、なぜか知らないけれども、ぴたーっと黙ります。あるいは集団の圧力で、恐らく彼らは教師としての私を見ているだけじゃなくて、周りの仲間を見ていますから、その仲間がどう考えるかということがまず中心になりますから、うっかりした質問をしない。自分だけ目立つのは悪いとか、いろいろなことがあると思います。これは極めて日本型で、いいとも悪いとも申しませんけれども、そこに外国人を1人入れたらすぐわかるのは、あっという間に、いわば活性化するんですね。

エネルギー問題で私が一つ申し上げたいのは、とにかくエネルギーがこれから非常に問題になってくる。そんなのはわかり切っているわけで、メタンハイドレートを掘ろうが何しようがいいんですけども、いずれも限度が来ます。結局、きちんと考えておかなければいけないのは、我々が適正に使えるエネルギーはどれぐらいだろうなということです。

どういう意味かというと、人間は変わりません。よく進化したとかいろいろなことを言うんですけども、実は短い時間で生き物は変わりません。1,000年前の人と現代の人は、遺伝的にはほとんど変わらないと見ていいです。そうしたら今後も人は変わらないという前提でいいわけで、教育で変わる部分は別ですが、生まれつきは変わらない。そうすると、どうしたって社会が必要とするというか、適正なエネルギーレベルがあるはずです。我々はまだそれを知らないわけです。

20世紀に入ってからのアメリカがいい例ですけれども、徹底的にエネルギーを使うという形、自由に使うという形でやってみたら、ああいう国になったんです。それがいいか悪いかも一種の実験みたいなものですから何とも言えないんですが、あれは多分もたないだろうというのが私の今のところの観測です。日本はもっとはるかに低いエネルギーレベルで文明をつくってきたわけです。それは明らかに参考になります。

恐らく今こういうエネルギー量を下げるという話をすると、政治家なんかは絶対嫌がるんですね。この間、大阪市長になった橋下さんが長いインタビューを朝日新聞で受けていました、たまたま私はその新聞で橋下さんの意見を読んでいたんですけども、若い方ですから当然かもしれませんけれども、現在の日本が生きているこのエネルギーレベルをどうしてもいろいろな形で維持するということを彼は言っています。そのためにいろいろな競争をしなければいけ

ない、社会を変えなければいけない。それはどっかで無理が来るだろうと、私は年寄りだからそう思うんです。どこで無理が来るかというと、今の我々が享受しているエネルギーレベルが人類の社会として適正であるという証拠は何もないんですね。どこが適正かというと、多分これより少し低いところが適正なのではないか。それは人間と外部エネルギーのバランスの問題です。そんなことを簡単には言えないんですけども。

もう一つ大事なことがある。私は年寄りだからと言ったのは、私は昭和12年生まれですから、それ前後の方はよくおわかりだと思うんですが、そういう人たちは子供の頃をエネルギーレベルがほぼゼロで過ごしてきています。外部エネルギーなしですね。わずかに薪、炭。子供の時は冬場でも半ズボンですよね。当時は何で食糧難かというと、食糧がないわけじゃなくて、爆撃とか戦災とかその他の影響で物流が完全に止まっちゃいましたから食べるものがなかった。

カボチャとサツマイモは今でも食べないという世代でございます。それが不健康かといったら、今日も午前中に病院に行って50代終わりの後輩の医者としゃべったんですが、同級生がまた死んだとか言っていまして、私の同級生に比べて若いほうがよく死ぬような気がするんですね。結構元気に育っていると言いたいんです。あのひどい状況で、要するに食糧難で食べるのも十分でない、暖房もない状態で、死んだ子がほとんどいるんですよ。しかも、後になつても元気です。

そういうことを考えますと、我々が主観的に考える人間が楽だというレベルは、我々自身にとっていいレベルに設定されていないんじゃないかという気がするんですね。だから昔の人が絶えず言うわけで、まさか千尋の谷底に子供を突き落せとは言いませんけれども、今の子供さんの育て方を考えると、ちょっとやり過ぎというかですね。だから、私が育った時代の話をすると、今だったら完全に児童虐待になるという感じです。

私はブータンにもよく行くんですが、ブータンの人が何を怒っているかというと、あそこは完全に全部自給自足の農家なんですよ。そこへたまたまWHOの人や国連の人が視察に来たりする。農家ですから小学生ぐらいの子供が農作業を手伝うじゃないですか。そうすると、それに対してWHOは児童虐待だと言うんです。そういう常識に日本も変わってきているんじゃないかなという気がします。これは都会ですよね。都会は、実はエネルギーがないと成り立たないんです。

古代文明をお考えいただくとわかるんですが、我々は四大文明と教わったんです。エジプトの地中海沿岸、今のイラクですがチグリスユーフラテスのほとり、インダス川のほとり、それから黄河文明。ここが現在どうなっておりますか。旅行したら歴然として、私の目から見れば、すべて完全な荒れ地でございます。

チグリスユーフラテスのほとりなんて本当に豊かなところで、ホモサピエンス以前にはネアンデルタール人が暮らしていた。ネアンデルタール人は狩猟採集民です。今のイラクに狩猟採

集民がいても、とる動物がありません。なぜそうなったかというのは明らかです。数千年の間あそこに都市を繰り返し繰り返しつくっていきましたから、すべての木が消えてなくなっただけです。森が消えたんです。

黄河がそうです。御存知だと思いますが、中国からの黄砂が降ってしまうがないと言いますけれども、黄砂が降る根本の理由は、言ってみれば、秦の始皇帝の頃からです。秦の始皇帝は何をしたか。御存知の万里の長城をつくっている。万里の長城は全部レンガですから、あのレンガを当時の技術で焼くことをお考えください。月から見えるぐらいの人工物を焼いたら、どれだけの薪が必要だったか。さらに始皇帝のお墓から有名な兵馬俑が出ております。兵馬俑というのは、等身大の人馬の焼き物ですよ。その焼き物を焼くのにどれだけ薪を使ったか。そうしたら、黄塵万丈の河北も草っ原ができるのは当たり前なんです。彼らが草っぱらで平氣でいたのは、その草っ原に小麦を植えるからだと思います。小麦文明というのは、荒れ地をつくらないとできない文明なんですね、原っぱをつくらないと。森を最初に切った土地は豊かですから、そこに小麦を植えたら小麦が生えるわけです。

小麦は元来どこからできたかというと、ナイル川が自然に年に一度氾濫して、氾濫した後に行けば非常に広い裸の土地ができるわけで、その裸の土地に種が風で飛んできて草が生える。その草の中から人間が選別していくつくれたのが小麦という植物ですから、元来が裸の土地に育つものです。ですから、森を切ってもいいと思っていたんだと思います。食糧を直ちに生産する土地に変えられるから。そういう形で古代文明の故地は、すべて裸になりました。それだけのことです。

その後、中国の歴史をごらんになるとわかりますが、歴史的には恐らく唐の時代が最盛期だと思います。きちんと調べていませんが、唐の時代には、黄河ではなくて、間違いなく揚子江流域の資源を使うことができるようになったからだと思います。それが終わった中国は、もはやマルクスが言うアジア的停滞の状態になりますが、停滞というのは、要するに何が起こったのか。エネルギーレベルが変わらないと考えたほうがわかりやすいと私は思います。

恐らく我々は、ここから先ひょっとするとエネルギーレベルが停滞する時期に入る。その時に適正なエネルギー量はひとりでに決まつてくるでしょう。でも、なぜ人のことを言ったかというと、エネルギー量を下げる時に、若い人は、それこそ橋下さんを含めて、これは悲劇以外の何物でもないと思っているからです。つまり、下げるというと丸損じゃないかと思っていると思うんです。私は、物事はそういうことはあり得ないと思うんですね。丸損もなければ丸儲けもない。

別の見方をすれば、エネルギーが下がるということは、逆に人の価値が上がるということなんです。我々がずっとやってきたことを私のような言葉で言いかえると、例えば今は社会福祉とか社会保障とかいろいろなことを言いますが、これは全部人のかわりにお金で置きかえてい

く制度ですよね。消費税を上げる、税金を余分にとる。そのかわり年金にする、社会保障費にする。エネルギーレベルが下がってくると、これをまた人に戻すしかないんです。人に戻すということは、人の生きがいが増えてくるということです。

現在日本は、歴史的に最高じゃないかと思いますが、年間3万人の自殺者を出しています。生きていて意味がない。どうして意味がなくなるかというと、当たり前の話であって、どういう能力の人であっても、自分が何かの役に立っているという意味がなければ人生を生きている気がしない。だけど、エネルギーが40倍ある社会では、あんたは要らないよということが十分起こり得るんですね。猫の手も借りたいという社会にはならない。我々はエネルギーがあるから、人をお金で置きかえてくる。

つまり、保険が典型的にそうだと思いませんけれども、ある意味では人に頼るかわりにお金に振りかえるというやり方をしてきました。それで別にいいんですが、私はいいとも悪いとも言っていません。しかし、レベルを下げていけば、今度は人のほうが大事になってくる。政治家がエネルギーを下げるということを言えないのはよくわかります。そんなことを言った途端に落選じゃないけれども、嫌なことは言えませんから。私はそういう立場じゃありませんから平気で申し上げますけれども、はっきり言えば、現代の日本人が享受しているエネルギーは多分無駄にでか過ぎる。

医療からいうと、例えば糖尿病予備軍を含めて2,000万人と言われています。2,000万人ということは、もう病気じゃありません。なぜそういうことが起こるかというと、当たり前の話で、運動不足と食べ過ぎですね。日本人がどのくらい全体として食べ過ぎかというと、食べ残しの食糧が、国際的な食糧援助量の3倍あるという有名な話があります。捨てているということです。そういう社会で暮らしている人が、食べ過ぎの運動不足で糖尿病傾向になってくるのは当たり前の話であります。これはやっぱり過ぎたためです。

私が学生だった頃の栄養学というのは、よく覚えていますが、こういう栄養素が不足すると、こういう病気になるということを延々と教わりました。それから10年か15年したら講義の内容がすっかり変わっちゃいまして、私はもう学生じゃありませんでしたけれども、こういうものが多過ぎると、こういう病気になるという栄養学に変わりました。ですから、その辺で時代はがらっと変わったんです。

それはやっぱりどっちも極端で行き過ぎでありますて、僕は何も戦後まで下げると言っているんじゃないんです。適当なレベルがあるでしょう。我々は面倒くさいものだから、人間とエネルギー、つまりお金と人のどっちをとるかというと、面倒くさい時は金にするんですね。人はややこしいですから。でも、そういった人をきちんとつくってきたのが江戸時代ではなかつたかという気がするんです。だから、この狭い島で4,000万人の人口を少なくとも養うことができた。

そういう時のシステムでは、どのぐらい人が不幸だったのか。私はブータンへもよく行くものですから、ブータンの国王が来られて、実はレセプションも出たんすけれども、今の日本人がブータンに対して持つ感覚は、明治維新の前、幕末に日本に来た外国人の書いたものを読みますと、私がブータンに行って感じることとそっくりなんですよ。裏返しになっているだけで。裏返しというか、表返しというか。つまり、私がブータンに行ってもそう思うんですけれども、こんな幸せそうな人たちを余り見たことがない。幕末に日本に来た西洋人は、ほとんど異口同音にそれを書いています。

日本最初の英國大使だったオールコックという人の手記が残っていますが、彼は長崎に上陸して、將軍に拝謁するために江戸まで東海道を延々と行くわけですが、その道中のことを書いています。当時、異人さんが通るというと、皆さん街道筋に弁当持ちで見に来たみたいですね。それを逆にオールコックが見て、こんな幸せそうな人たちを見たことがない。ただし、ここに我々の文明を持ち込むことが果たしてこの人たちにとって幸せかと、やっぱり当時既に書いています。

我々がブータンを見て感じるのは同じことだと思いますね。ブータンも当時の日本に非常によく似ています、ほとんどの家が自給自足の農家です。そういう社会の中に今、急速に近代経済が入り込んでいっています。だから、維新の当時の日本を見るような感じがするんですね。

言いかけていたのは、エネルギー量を下げるということは、皆さん嫌なように感じるかもしれませんけれども、こういう非常にマクロというか大きな話は、絶対に損だけとか得だけという話はないんで、必ず裏表があるわけです。それで大事なことは、当然ですが、人の価値が上がっていく社会を我々はつくるべきじゃないか。

それはもう一つあります。人口が減っていくからです。当然のことですが、人が減っていきますと、人が大事になります。今テレビを見ていると、どうして今の人って頭がかたいんだろうと思うんですけども、若い人が減って年寄りが増えるから年金の負担が大変だ、そればっかり言っていますね。しかし、人の生きがいとお考えください。自分が何とかしていかなきゃいけない人が増えるほど、人は元気が出るんですよ。人生の意味が出てまいります。若い人がふてくされている間がないんですよ。

そういう意味では人間を非常に信用していまして、本当に困って動けない老人がいたら何とかして助けてやるというのが、ごく自然の人情だと思います。それをお金に振りかえていく社会は、老人が増えて若い人が減ったら金が大変だって、お金で考えるからです。生きがいで考えたら全然違ってくる。生きがいは数字にななりませんから。

突然の話ですが、私は去年の9月から10月初めにヨーロッパに旅行しました。中部ヨーロッパ、特にミュンヘン、南ドイツから始まってウィーンに行って、プラハに行きましたして帰ってきたんですが、その間何をしたかというとお墓を回っていました。毎日お墓参りに行っていま

す。何の関係もないんですけども、ヨーロッパの墓をちょっと調べているものですから行つたんです。ただ一つだけ日本の墓参りに近いことをやった墓がありまして、ウィーンのユダヤ人墓地にヴィクトール・フランクルという人のお墓があるんです。ユダヤ人墓地にあるのでおわかりだと思うんですが、この人はユダヤ人です。

御存知の方も多いと思いますけれども、「夜と霧」という有名な著書があります。彼はドイツのナチの強制収容所に入れられているんです。御両親と妹さんと奥さん、全部収容所で亡くしています。彼はウィーンに住んでいて、ナチの迫害が始まる直前にアメリカへ留学する許可ももらっていたんです。しかし、御両親を残していくことになるので悩んで、いろいろな話があるんですけども省略しますが、ともかく残ることに決めて、居残って、わかっていてそういう目に遭う。それでその収容所を生き延びて出てきた人です。

私ずっと若い頃から尊敬しているというか、書かれたものを読んでいまして、いつも思うんですけども、よくナチは非人道的と、今でも映画とか小説なんかを見ると極悪非道に書かれていますけれども、別に弁護するつもりじゃないんですけども、それだって人がやっていることですから、そんな人ばかりじゃないはずです。彼の書いたものを読んでいますとしみじみ思うのは、ナチの人だろうが、そうじゃなかろうが、この人だけは殺したくないという人があったんだと思う。だから、彼は生き延びたんだと思います。それは彼が書いている中にところどころに出てくるんですよ。

一つだけ申し上げれば、最後の日、どこの強制収容所だか忘れましたけれども、前の日に戦線の砲声が聞こえてくる状況。ということは、戦線が近づいているわけですから、間もなくドイツ軍が押されて収容所の上を通り越していくんですね。そうすると解放ですね。明日は解放されるって囚人はみんなわかっているから喜んでいる。次の日の朝になった時に彼が一番がっくりするのは、次々人が死にますから、前の晩に死んだ囚人を森に埋葬に行けと命令されて、もう一人の仲間と一緒に森に埋葬に行くんです。穴掘りをやって、何時間もかかって埋めて帰ってくる。何と収容所はもぬけの殻です。すべての囚人が大型トラックに乗せられて移送されてしまいます。だから、彼は生き残ったんですよ。私は、これは偶然じゃないと思います。つまり、収容所側が彼を残した。

その人のお墓があるので、そこへ墓参りじゃないんですけども行った。フランクルが残した言葉で私が一番驚く言葉は何かというと、「人生の意味は自分の中にはない」と言っていることです。これはなかなか言えないと思うんですね。特に今の社会ではそうだと思いません。

皆様はおわかりだと思いますけれども、私は、戦後ずっと受けてきた教育で、個性とか自分とか、そういうものを大切にしろとさんざん聞いてきましたけれども、「人生の意味は自分の中にはない」という言葉は聞いたことないです。でも、考えてみれば、我々の若い時の子供の頃の育ちで言えば、特攻がまさにそうでした。10代の終わりで行っているわけですから。そ

ういう教育を我々は少なくとも受けてこなかつたし、してこなかつたような気がします。

自分の中だけに人生の意味をとらえてしまふと、自殺者3万人は割合に当たり前だと思いませんか。自分で生きているんだつたら意味はほとんどないという気がします。少なくともああいう状況でばたばた人が死んでいって、それも全く理不尽な死に方をしている、そういう状況で生きた人が「人生の意味は自分の中にはない」と言ったことが私はいつも頭に浮かんでくるんです。

別にそんなお人よしにしろという意味ではないんですけども、恐らく彼が生き延びたのも、そういうことが何となく誰にもわかるからだと思うんですね。たとえナチの人であっても、あいつは嫌だ、殺したくないという気持ちがあったんじゃないかというのが私の勝手な解釈です。

ついでに申し上げると、その時に同時にいろいろ勉強をさせていただいたんですが、おもしろいと思ったのはユダヤ人です。御存知のように日本人とユダヤ人はよく似ているところがあると言われますね。全く違うところもあるんです。私は、ユダヤ人とは何かということが長いことわからなかった。人種でもない、宗教だけでもないんです。それはユダヤ人のことを書いた本を読めば書いてあります。簡単に定義できないんですよ。でも、ユダヤ人はあることははっきりしていまして、例えば墓を見るとそれが一番はっきりわかる。

中部ヨーロッパのお墓というのは、大抵町に三つあります。どういう意味かというと、カトリック墓地があって、プロテstant墓地があって、ユダヤ墓地があるんです。どうして三つあるかというと、カトリックとプロテstantは、特にドイツの場合、南ドイツとか中部ヨーロッパは新教と旧教の間で三十年戦争をやっていますから、ひとりでに墓も分かれちゃったんだね。それはわかるんですが、それ以外にユダヤ人墓地が必ずあるんです。

ウィーンのユダヤ人墓地は結構広い区画を占めていまして、しかも、あちこちにある。前から何でユダヤ人墓地があんなにあるんだろうと不思議に思っていた。墓地から見ると、ユダヤ人の人口はかなり大きいんですよ。それが今回誤解だとわかりました。ユダヤ人墓地がどうしてあんなにたくさんあるかというと、あるいは広いかというと、ユダヤ人は墓を壊しちゃいけないんですね。

都市計画でちょうどユダヤ人墓地の上に道路が通るとなつたらどうするか。日本でもキリスト教の墓地でも、お墓に道路を通すことはありますよね。そうすると、キリスト教でも日本でも別に問題なくて、そこにお墓のある人、現在関係のある方はお墓を移してくださいということをやりますでしょう。ユダヤ人はそれができないんです。どうするか。地元のユダヤ人が金を出し合って下の土をのけるんだそうです。そうすると、墓が全部ストンと落ちますね。その上に道路を通す。どうしてこういうばかなことをするか。墓は絶対に動かしちゃいけないんです。それはなぜかということです。

それで初めてわかったんですけども、まず第一にユダヤ人に来世はないです。キリスト教

の親戚ですから、旧約聖書がありますから、死んだら天国か地獄かとか思いますでしょう。それがないんですよ。旧約聖書はメシア、救世主が来るのを待っているんです。いずれ救世主が現れるんですけども、キリストが救世主だというふうに見たのがキリスト教です。キリストは本当のメシアじゃない、これから来ると言っているのがユダヤ教です。

ですから、亡くなったユダヤ人はまだ救世主が来るのを待っているわけですから、とりあえずいるんですよ。どこにいるかというと、墓にいるんです。そこに本人がいるんです。そこが日本人の感覚と全く違うんですよ。墓には魂だけが残る。だから、日本の墓から出てくるのは幽霊ですけれども、外国の墓は本人が出てきますから、吸血鬼になったりバタリアンになりましたりするわけです。

それは案外気がつかれていないですよ。日本は死んだ途端に別になっちゃうんですよ。別になるとはどういう意味かというと、例えばJRの事故とか殺人の被害者とか、あるいは火事で死んだとか、警察が扱った時に何と言っているか。隠語ですけれども、死んだ人を「ホトケ」と言っています。これは単なる俗語ではなくて、やっぱり意味があると思う。どういうことかというと、人間ではないということです。日本の社会は、死んだら最後、人ではないんですよ。

人は世間のうちの人。世間に属しているのは人なんです。だから、日本人は人と言うだけではなくて人間と言うんです。「人間」という言葉は、中国語で言えば「世間」のことです。人と人の間ですから人だけを指している。これは複数の人、人のつくっている社会を指しています。今でもそうでしょう。明治の人は漢文に詳しいからそれをよく知っていましたから、「人間」と書いて、「ジンカン」と読ませる場合には「世間」という意味、「ニンゲン」と読ませる場合には「人」という意味に使い分けていました。漱石なんかちゃんと使い分けています、「人間(ジンカン)に交わる」と書いていますから。人間に交わるということは世間づき合いをしているということになります。

それが何だと思うかもしれないけれども、中国語は漢字一つ書いたら、犬でも猿でも猫でもそれでいいわけでしょう。ですから、「人」と書けばいいのに、どうして日本では「人間」なんですか。それは日本では「世間の人」だけが「人」だという暗黙の了解があるからです。世間の人でない人を何と呼ぶかというと、外の人ですから「外人」。中国人と韓国人になると見た目でわかりませんから、わざわざ「外国人」と言う。外国籍の人って。

死んだら世間の外に出るというのが我々の一番きついルールです。即座に仏になります。それを一番よく示すと思うのは、告別式に行った時に御会葬御礼をくれますけれども、あの封筒を開けて見ると、中にもう一つ小さい袋に「お清め」と書いてあります。私は若い時から解剖をやっていましたから、死んだ人の最後のお見舞いに行って何で塩をくれるのかなというのが疑問でした。私なんか病院でしたから死にそうな人のところによく行きますから、明日死にそうな人のところへお見舞い行ったら半分塩をまくのかよとか冗談でよく言っていましたけれど

も、清めは何をやっているのか。

日本は死んだら必ず戒名になります。私はへそ曲がりですから、自分の墓は俺の名前で「養老孟司の墓」とやっておけと女房に言う。やってくれると思いますが、それを石屋に頼むと必ず一つだけ余計なことをすると思うんです。そう墓に書いたら、肩に「俗名」と振るんです。俗名と振るということは、亡くなったら別の名前があるはずだということで、それは戒名ですね。なぜ戒名にするか。死んだら最後、仲間じゃない。世間の人じゃないということを示していると私は思います。それを教えているのが清めの塩であり、戒名である。私が言っているのは実質的な意味ですよ。お坊さんがどういう解説をするか、神社の人はどういう解説をするか全然関係ありません。社会的な意味を言っています。皆さん方はそれを当然としています。つまり、世間から出たのは仲間じゃない。だから、日本人は割合に死んだ人を特別扱いします。

外国の墓はもっとはっきりしていまして、必ず本人の名前が書いてあって、生年月日があつて、死んだ年月が書いてあります。私が一番嫌いな西洋の墓は、特に若い人なんかだと写真が入っています。親がかわいそうだと思うんでしょうけれども、私から見ると物すごく生臭い感じがするんです。でも、西洋人の感覚がこれでよくわかって、ここにいるのは本人だということです。日本人は墓にいるのが本人だと思っていませんでしょう。何となく本人につながる何かだ。ですから、死んだら仲間から外すというのをユダヤ人の場合と日本人の場合とあわせて何と読むかというと、恐らく共同体というふうに社会科学の人は言っていると思います。

今のエネルギー問題から何でこう言ったかというとおわかりだと思いますが、さっき人の価値ということを言いました。そういうものを維持するのは、ばらばらの社会ではなくて、やはり共同体がどうしても必要です。その共同体を我々は日本共同体という形でずっとやってきて、その一つのルールは世間でした。

明治の人がどう思っていたかというと、和魂洋才と言っています。つまり、あれだけ西洋の文物を取り入れて何ともないと彼らが思っていたのは和魂があるからで、その和魂は大和魂みたいなものと誤解しているかもしれませんけれども、私はそう思っていないんで、明治の人が和魂と表現したものは何かというと、その正体は世間の慣習だと思います。世間というのは動かんよと、非常にかたく信じていたと思います。

もう一度それに対して大きな衝撃が来たのが戦後の新憲法です。そこで日本の世間がある意味ではがたがたになったんですね。例えばきれいに家制度が消えました。これはいい悪いを論じているんじゃないかもしれません。さっき言いましたけれども、そういう大きなことは必ず裏と表があるわけで、例えば家制度がなくなったおかげで非常に楽になったのは女性ですね。そのかわり何がなくなったかというと、我々は長期の見通しを日常的になくしてしまいました。つまり家業というものが、特殊なものを除いてはどんどんなくなっていましたし、非常に多くの人が、いわば近代化してサラリーマンとして会社に勤める。これはこれでいいんですけども、

社会の連續性というものに対する歯どめがなくなってきた。暗黙の歯どめだけですね。

家制度だって実質的に残っている部分はかなりあります。例えば政治家が典型的ですね。何で政治家は2代目、3代目、4代目になるんだ。地盤、看板が必要な職業は継いでいく家が必要ですね。実は地方の開業医がそうですよ。あるいは古典芸能、歌舞伎なんかもそうです。そういうふうに業種によって保存されている。襲名とかの意味合いも今ではほとんど理解されなくなつてまいりましたけれども、新憲法になって100年たつていませんけれども、半世紀以上たつていますから、そろそろ考え方を直したほうがいいんじゃないかなと私は思っています。

何を考え直すか。憲法を変えろとかそういう意味じゃなくて、一体我々は何を変えたんだろう。その結果、何が起つたんだろうということですね。それで共同体というものをもう少し考えたらどうかなと思うようになりました。そのことがさっきのエネルギーの話とつながっているのはおわかりいただけると思うんです。

ユダヤ人のことを言いかけたから結論を言っちゃいますと、ユダヤ人は何かというと、死んだ人まで含めた共同体です。死んだ人がいまだにメンバーで入っている共同体です。日本は死んだ人をきれいに切り落とした共同体です。どっちでもいいんですが、ともかく共同体であることには変わりがない。ですから、その中の義理人情みたいなことは、ユダヤ人の小説家が書いた小説をお読みになることがあつたらすぐわかると思います。アングロサクソンですね。イギリス人、アメリカ人の書いたもの、あるいはドイツ人の書いたものと全く違うからです。どういうふうに違うかというと、家族感情。家族の中の感情のやりとりなんかが見事に似ています。これは共同体の特徴です。

亡くなられた一橋の学長をやられた阿部謹也さんという方がおられまして、ドイツ中世史が専門で、その方の自伝におもしろいことが書いてありました。ドイツの場合、大学は小さな町にあるんですね。阿部さんが最初にドイツの小さな町へ留学されて、古文書を調べるために図書館に行くんです。そうすると、たまたま居合わせた教授の人が、自分がついた人じゃないんですけども、親切に調べ方なり何なりをいろいろ教えてくれたんです。阿部さんは「ありがとうございました」と言って、小さい町ですから、それから一月か二月して道端でばったりその教授に会つたんで、日本人ですから「先日はお世話になりました。ありがとうございました」と感謝の挨拶を始めたところが、相手がぎょっとしたような顔をして逃げ腰になったと言っています。

つまり、理屈で言うと、ドイツ人の場合でしたら、たまたま日本人の留学生がいて、図書館で困っているからいろいろなことを教えてやって、その時におまえは俺にありがとうと言って感謝したる、それで関係が切れるんですよ。それはそれなんです。道端で次に会つた時にそれを持ち出されて「ありがとうございます」と言われたということは、今度は何を頼まれるかという話になるんです。日本人の場合は全く違いますでしょう。この間はありがとうございました

た、それを忘れていません。だから、何かあった時に私にできることでしたら致しますという意味で、お礼の挨拶をする。ドイツ人の場合は全く違うんですよ。それをドライと言うんです。そこで切るんだから、1回1回。

私もドイツ人とのつき合いがありますけれども、必ず切れます。何らかの意味で、どちらかが働きかけない限り関係が切れます。切れても、もちろん前の関係がありますから、行けばそれを思い出していろいろやりますけれども、それが日本の知り合いと非常に違うところです。さっきから共同体と言っているのが皆さんピンとこないと思うので、そういった共同体性は日本人とユダヤ人は非常に似ています。

もう一つ、ユダヤ人の言ったことで私の記憶に残っているのは、「人生の意味は他人の役に立つことです」とプラハのユダヤ人に言われました。学者やジャーナリストやいろいろな人がいますけれども、彼らの根本の動機は他人の役に立つことです。他人というのは、今も言いました死んだ人まで含めてますから、日本人より結構範囲が広いんです。だから、学問とか芸術でもいいんです。死んだ後でも役に立っています。

我々がつくってきた社会は、むしろそれに近い社会ですね。ユダヤ人になれと言うんじゃないですよ。ユダヤ人の一番の問題点は、いじめられることです。それは日本の世間と同じで、こうやって固まると周りからうさん臭く見られる。この前の戦争と何度も言いますけれども、京都でこの前の戦争と言いますと応仁の乱になっちゃう。これは冗談じゃないんですよ、本当にですね。日本は広いんですね。これがうさん臭く見られたことがあると思うんです。ユダヤ人は何回迫害されているか。調べたら、歴史上切りがないと言っていいです。

プラハには旧ユダヤ人墓地がありまして、これは観光名所です。何でかというと、ユダヤ人はプラハにずっと住んでいまして、ゲットーなんですよ。ゲットーというのは、塀をつくって、その中しかユダヤ人は住んじゃいけないというユダヤ人居住区ですね。その中に当然お墓があるんです。居住区が狭いですから墓も狭い。中世以来のユダヤ人がそこにずっと埋葬されています。さっき言ったように彼らは墓を壊せないから、案内的人が「今は高層ビルと同じで12層ぐらいになっていますよ」とか言っていました。そういう旧ユダヤ人墓地がありまして、行かれたら必ずごらんになるんじゃないかなと思います。

言いたいのはそれじゃなくて、その隣に戦後新しい小さい礼拝堂が建っているんです。礼拝堂にいろいろなものが展示してあるんですけども、そこへ入ったら白い壁が全部文字で埋まっているんです。プラハは旧チェコスロバキアの首都です。同じようにナチの時代にユダヤ人は迫害されました。チェコスロバキアの村や町の名前がまず書いてあって、その後に人の名前があって、その人の生年月日と没年が書いてあって、それで完全にすべての壁が埋め尽くされています。これは強制収容所で死んだユダヤ人です。墓がありませんから、墓のかわりに礼拝堂の壁に全部それを書いてあります。亡くなった人は全部共同体のメンバーですから。そういう

う意味の共同体性というのが、ユダヤ人の場合でしたら本当に数千年、人類の歴史が始まっています以来と言ってもいいと思いますけれども、続いているわけです。

これを真似しろというんじゃないですが、日本人がこれから生きていくのに参考になるなと思いました。今の若い人はよく国際競争とか言っていますが、個人としてヨーロッパなり中国なりの社会に出ていってちゃんとやっていけると思いますか。そこなんですね。やっぱり日本型というのは何を言っているのかというと、私はこの共同体型を言っている。そのことをそろそろもう少し意識したほうがいいんじゃないかな。

大学もそうでしたけれども、日本人は割合野放団に国際化とか言うんですよね。私が医学部にいた時も、20年ぐらい前になりますけれども、学部長が国際的な、国際水準の大学にしたいと言う。国際水準の大学とは何だろう。僕らはすぐカンボジア並みかとかラオス並みかと考えますから、国際水準というのは。

それでは、ドライな社会でこういうものはないかというと、絶対あると思います。ナチはさんざん悪口を言われますが、ナチを見ていますとどこかの共同体性を感じませんか。ヒトラーユーゲントから始まって、同じ制服を着て、何か人間ってそういうものが欲しいんですよ。

私の友達のラオスにいる男は日本人ですけれども、彼は中国のパスポートを持っているんです。いろいろなきさつがあるんですけども、二重国籍なんですよ、一方で中国人なんです。彼は中国の華僑会に入っているんです。華僑の集まり。ラオスで華僑会は何するか。僕がラオスに行って彼と一緒に車に乗っている時に彼の携帯に電話がかかってきました、奥さんの弟が田舎でオートバイで交通事故を起こした。大変だ。彼が相手と電話でやりとりしているんです。とりあえず現金が必要だったら華僑会の会長のあの人に、誰々さんに頼めと電話で言っています。おわかりになりますか。そういう時に日本で何々銀行の何々支店長に頼めと言いますか、言いません。保険会社のどこそこへ頼めと言いません。保険をおろしてもらうためには大変な手續が要ります。急場にそれじゃ間に合いません。そういう意味の互助会的な組織がひとりでにできていくんですね、共同体がない社会でも。

私は、華僑会がそうであり、極端に言うと、有名なのはイタリアのマフィアだと思います。シシリーは絶えず支配者がかわったところです。地中海の真ん中に突き出した島ですから、しそっちゅう行ったり来たりして人に支配される。そういうところではどうしたって自衛組織が必要です。言ってみれば、山口組の始まりみたいなものですね。これは有名な話ですが、何で山口組ができたか。地震でやられた地区が空襲でやられまして、同じように壊れたんですよ。それで地権もなくそもなくて、終戦後ですから、いわゆる戦勝国になった。それで第三国人という言葉ができたが、言ってみれば勝手に仕切っちゃって、神戸の商店街が自衛のために自警団をつくったのが始まりだった。

それがある意味では人の自然だと思うんですね。そういうものを我々は陰のものというか。

いつも陰だっていいんですよね。表があれば、必ず裏があるわけですから。恐らく日本人も、いわゆる国際化ということになれば、そういうことを必要とする時代に突入していくんだろうという気がします。橋下さんが典型だとは言いませんけれども、彼も何となくそういう勘はあるんじゃないですかね。あの人がそういうことが上手だとは言いませんけど。

我々はそういうものをこれからつくっていかなきゃいけない。何も華僑会とかマフィアをつくれとは言いませんけれども、日本人はそんなものをつくれと言わなくても、ひとりでに上手にやっていけるだけのバックといいますか、歴史を持っているわけですね。それをもう少しとともに考え直せばいいだろう。

何でこんな話になったかというと、さっき言ったように、多くの若い人、それこそ橋下さんも含めてですが、若い世代はエネルギーレベルを落とすことを不幸以外の何物でもないと頭から思っているから。私は思っていません。それを言えるのは、エネルギーが非常に低かった時代を生きてきた人ですよ。若い人は無理です、想像つかないんですから。我々みたいな育ち方をしたら本当に児童虐待としか思わないと思いますよ。それは我々が生きている間しかできることですから。それだけ低い状態を自分が体験することはできない。

時々私は乱暴に日本の小学校の1学級、1学年をラオスの学校と取りかえろとか言っているんですけども、子供でも1年間向こうにいれば、エネルギーが低い状態はどういう状態かわかります。それが不幸かといったら、別に不幸じゃないということは子供ならわかる。

農山村の留学制度みたいなのがありまして、水洗便所のないところで生活させても、今の子供なら1週間あれば慣れます。それが不幸か考えてみてください。私が子供の頃は水洗便所以外の便所しかなかったですから。今的人は水洗便所じゃないととんでもない非文明的な生活だと思うんじゃないでしょうか。そういう意味で我々なんか完全な野蛮人です。なぜあんなものが必要かというのをきちんと理屈で説明することができると思うんですけども、今日はそんな話じゃないからやめておきます。

エネルギーが低くなることについて、まず第一に、それが不幸みたいに思うのはやめてもらいたいなということですよ。むしろ適正な水準を探すということです。

もう一つは、エネルギーを使うなと言うのも意味がない。どうして意味がないと思っているかというと、国際統計を比較したらおわかりになると思うんですけども、例えば中国に物づくりを移すと言うけれども、皆さんが本当に地球環境を心配しているなら、中国やロシアやインドで物づくりをされたらエネルギーの無駄遣いなんですよ。それはおわかりいただけます。エネルギー効率がいかに悪いところで製造をやっているかということは、もう統計にきれいに出ているんです。それだったら、日本人がエネルギーを使って物をつくったほうが世界のためなんです。ということを誰も言わないんですね。

これだけ環境問題をうるさく言って、模範的にエネルギー節約するのは日本人で、垂れ流し

ているのはアメリカなり中国なりですから、その時に地球が温暖化するから日本はエネルギーを使うのはやめましょうみたいなことを日本で言うのはお門違いです。よく申し上げますが、日本人全員が腹を切っても世界の炭酸ガスは4%しか減りませんから。本当にそうなんですよ。日本の主張は全く逆にすべきで、このぐらいきちんと能率的に上手にエネルギーを使っている国はないんだから、製造業に使わせるんだったら日本人に使わせろというのが理屈です。

でも、日本人は外国に対して何もかも謙虚ですね。頭を下げていればいいって、日本の場合はそれで商売が進みますけれども、国際的にはそうはいかない。言うことを言わなきゃいけないわけで。高い石油を買って一生懸命働いて、またその石油を買う。何のために働いているか。もしかして産油国のために働いているんじゃないかという気がしないでもないですね。今年なんか貿易赤字と言っていますけれども、赤字の大きな理由の一つは原油でしょう。我々は原油を買わなきゃいけない状態をつくっちゃったわけですから、これを減らすことは何を意味するかというと、余計に働かないで済むということです。

経済指標が下がることと余計に働かないで上手に生きるとは別でしょう。収入が減ってきた時にそれで上手に生きるというのは、皆さん景気が悪いような気がして嫌がるんですけれども、私は虫とりやっているからよくわかるんですけども、あんなもの金がかかりません。金をかけようと思えば幾らでもかけられますよ。でも、減らすと言えば幾らでも減らせるんです。結構同じように楽しめます。そういう生き方を我々はこれから若い人にも教えてやると言うと偉そうに聞こえますから、それでも大丈夫ですよという安心感を与えてあげる必要があると私は思うようになりました。

少なくとも現在日本で現役で政治家をやる人は、エネルギーレベルを下げるは絶対言えませんね。政治家に今の私のような話をするときには長くたって4年で選挙ですから、彼らは選挙民が嫌がることを一言も言えないです。だから、遠回しに考えていけば、まずエネルギーレベルを下げていけば、人の価値が上がっていくでしょう。ここまで人の価値を下げていいんですかというのが実は私の本音です。人に頼るより、保険や年金やお金で暮らしたほうがいいと、本当に皆さんは思っておられるんですか。そういう社会が理想的な社会だと。お金があれば誰にも干渉されないで、自分が好きなように生きられると思っているんでしょうかね。そうはいかないのはよくおわかりだと思うんですね。

生きていれば、いろいろな人がいて、それこそ世間の目があり何があって、どうせ人とつき合わざるを得ない。私なんか理想的に暮らしたいとしたら、虫をとって、虫をいじって毎日生きていれば一番いいんですけども、それで生きられるぐらいなら、とうの昔、若い時にやっていますわ。それをやらないということは、世間で生きているということは、応分に世間とつき合わざるを得ないということであって、それが人と人のつき合いです。

戦後のアメリカ風のシステムではそれをできるだけ切っていく形をつくっていったような気





## 第二部 懇親会

司会 萩原喜代子

18:35	開会の挨拶	宮尾紘司 I.M. 実行委員長
	歓迎の挨拶	池森由幸 ホストクラブ会長
	演 奏	金原聰子(ソプラノ) 日比野梅子(ピアノ) 鈴木 紗(ヴァイオリン)
19:15	乾杯発声	千田 育 ガバナーエレクト
	会食・懇親	
	閉会の挨拶	吉田 玄 分区幹事
20:20	ロータリーソング “手に手つないで”	
20:30	閉 会	



# INTERCITY MEETING

## 特別出席者

(敬称略)

ガバナー	松前 憲典	一宮中央
地区幹事	長谷川正己	一宮中央
地区副幹事	石原 稔久	一宮中央
ガバナーエレクト	千田 豪	名古屋東
パストガバナー	福田 浩三	名古屋空港
パストガバナー	盛田 和昭	名古屋
パストガバナー	加納 泉	名古屋中
パストガバナー	神戸 政治	あま
パストガバナー	野村 重彦	刈谷
パストガバナー	豊島 徳三	一宮北
パストガバナー	大島 宏彦	名古屋
パストガバナー	高橋 治朗	名古屋西
パストガバナー	片山 主水	名古屋東南
パストガバナー	田嶋 好博	名古屋北
元名古屋第二分区代理	日比 肇一	名古屋北
元名古屋第二分区代理	浦野 三男	名古屋北
元名古屋第二分区代理	古川善次郎	名古屋東
元東名古屋分区代理	上村 晋也	名古屋和合
元東名古屋分区ガバナー補佐	坂本 精志	名古屋名東
元東名古屋分区ガバナー補佐	星川 直志	名古屋名北
元東名古屋分区ガバナー補佐	細野 恭弘	名古屋昭和
元東名古屋分区ガバナー補佐	佐藤 正延	名古屋守山
元東名古屋分区ガバナー補佐	國分 孝雄	名古屋和合
元東名古屋分区ガバナー補佐	村橋 泰志	名古屋名東
元東名古屋分区ガバナー補佐	遠藤 友彦	名古屋名北
西名古屋分区ガバナー補佐	三浦 和人	名古屋名南
次期東名古屋分区ガバナー補佐	井上 雅之	名古屋昭和
次期I.M.ホストクラブ会長	横田 幸三	名古屋昭和
桜花学園高等学校インターラクトクラブ顧問	河合 保昌	
おんたけ市民休暇村鳥獣展示館長	林 昌利	

## 参加者数

クラブ名	I.M.登録者数	特別出席者	合計
名古屋北RC	83	3	86
名古屋東RC	82	2	84
名古屋守山RC	46	1	47
名古屋和合RC	99	2	101
名古屋名東RC	55	2	57
名古屋名北RC	36	2	38
名古屋昭和RC	41	3	44
名古屋錦RC	28	0	28
名古屋東山RC	35	0	35
名古屋葵RC	20	0	20
名古屋千種RC	39	0	39
計	564	15	579
地区役員		3	3
分区外		12	12
合 計	564	30	594

